

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：酒井 健 作成日：2026年2月24日

1. 教育の責任

教育の理念に掲げられた内容を「心理学メジャー」として実現すべく、自らの心の健康を維持し、他者との関係を通してよりよく生きるために、よき社会人となるために、必要な知見や姿勢を心理学の学びを通して少しでも身につけられることを念頭に、以下の授業を担当（2025年度）している。

【通学課程】

「映画で学ぶところの世界」（講義）

「臨床心理学概論」（講義）

「心理的アセスメント」（演習）

「心理演習」（演習）

「ゼミナールⅠ・Ⅱ」（演習）

「卒業研究」（演習）

「心理実習」（実習）

「カウンセリングスキル」

【通信課程】

「臨床心理学」

「臨床心理学実習」

「他者理解のための心理と演技」

2. 教育の理念

「建学の精神である“STUDY FOR LIFE（生涯にわたる、人生のための学び）”に基づき、豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材を育成し、地域の教育・研究及び生涯学習の中心として、地域社会・国際社会に貢献することを目的」とする本学の現代社会学部において、「現代社会を多面的・学際的に捉えるための情報収集・分析能力、社会課題の発見・解決に資する実践力とよりよい社会の構築に向けた構想力・行動力、社会の諸活動に主体的に参加する意志の育成」のために、心理学メジャーに属する教員として、心理学の学びの内容をその視点の中心として位置づけそこから視野を広げるための基礎となる考え方を、ひとりひとりが自ら作り上げていけるようになること、すなわち、どこかにある誰かが発見した正解ではなく、さまざまな知見を学びその知見が生み出された方法や考え方をすることで、一人一人が個別に遭遇するそれぞれの課題解決場面において自ら考え選択し前に進めるようにできるだけの援助をすること、が教育の理念である。

3. 教育の方法

初めて心理学という内容に触れる授業という位置づけの授業で、筆者が担当する「映画で学ぶところの世界」は主に深層心理学の考え方をベースに、こころを理解するとはどのようなことかを具体的に提示し、また提示された内容を元に受講生各自が自らを振り返り考えることで様々な気づきを得られるように心がけている。

「臨床心理学概論」「精神分析」では、主に心の病や苦悩、悩みそして心の健康に関する内容を取り上げながら、成長とは何か、成熟とは何か、悩みや葛藤を乗り越えるとはどういうことかについて、自分自身だけではなく、他者や社会全体にまで視野を広げて広く捉えられるように、そのきっかけとなるような内容を意識して講義している。

上記以外の科目についても、授業内容自体はそれぞれの科目名称に基づいて異なっているが、基本部分は共通である。

心理学はこころという目に見えないものをどのように測定するかということを基本とする学問である。こころは果たしてどこまで客観的すなわち科学的に扱い得るのか、また科学的に扱うことで十分なのかなど根本的な部分においても議論が多い。心理学を学ぶところがわかるかというむしろこころというものがいかにわからないかということがわかるのかもしれないが、むしろそのことが本学の教育理念である「現代社会を多面的・学際的に捉える」姿勢の醸成につながると考えている。学部で心理学を学ぶということは、心理学という学問分野を

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：酒井 健 作成日：2026年2月24日

通じてそのような姿勢を身につけることであり、その意味において極めて教養的であると捉えている。もちろん大学で学ぶ専門分野としての意味や、大学院進学ののち、例えば公認心理師や臨床心理士の資格を取得し心理臨床の専門家を目指すための第一段階でもある。それらのニーズにも応えつつ、学部で卒業する多くの学生に対しては、よき社会人としてよりよく生きるための土台となるきっかけとなるような内容を含むよう講義している。

4. 教育の成果

本学卒業生で、公認心理師・臨床心理士の資格を取得して専門職に就いているものが2名、現在大学院で学んでいるものが1名となっている。少数ではあるが、より高度な内容への学びとつながっていることは一つの成果であると考えている。

5. 改善への努力と今後の目標

入門的位置づけである「映画で学ぶこころの世界」は、心理学専攻希望学生のみならず、現代社会学部さらには他学部の学生にも興味を持てるようなテーマとしている。同時に内容は簡単にしすぎないように、むしろこころを理解するということは簡単ではなく、正解もなく、だからこそ考え続けることが大事であるという内容にしている。そのためかは定かではないが、授業アンケート結果などは二極化する傾向がある。すなわち「興味深く面白い」という極と「何が答えなのかわからない」という極である。授業担当者としては、「何が答えか」正解が簡単に出せないこと、または出さないこと、それでいて暫定的にせよ自分で「正解」を選ばないとならないことの奥深さを体験してほしいのだが、その面白さを十分伝えられるところまでは達していないと思われる。これが今後の改善目標である。

【添付資料】